

これからの図書館の姿

～佐久穂町図書館での実現可能性を考える～



長野県佐久穂町 小林志保

はじめに

近年、新しい公共施設の在り方の可能性を秘めた場所として、図書館が注目されている。実際に従来イメージを払拭するような新たな取り組みをしている図書館が全国各地で増え始めている。国立国会図書館勤務から東京都千代田区の図書文化課長に就任し2007年に千代田図書館をリニューアルオープンさせ、全国でも有数の注目すべき図書館を作った柳与志夫氏は著書で「日本の図書館は今大きな転機にある」「従来の業務・サービスの枠組みを再構築することを迫られている」と述べている。(柳与志夫, 2012, 13p)

従来の図書館といえば、本を無料で借りられる場所、静かに勉強をする場所。利用者は学生や研究者、識見者に限られているというイメージではなかったろうか。学生時代に図書館を使ったきりで、すっかり足が遠のいてしまったという人も多いだろう。また、図書館は図書館法第17条の規定にのっとり本を無料貸出しているが、ベストセラーを何冊も複本としておき大量の利用者に貸出している状況が『無料貸本屋』という不名誉な名前でも批判の対象にもされている。更に、利益を生まないが維持費はかかる施設として、行政の中でも頭の痛い存在として扱われることもある。そんな現状を知りながらも、図書館側も「理解してくれる人だけが使ってくれば良い」という何処か傲慢なところもあったのではないかと思う。しかし今、従来の図書館の在り方に疑問を持つ人が現れ、また図書館側も変わらなくてはいけないことに気付き始めているのではないだろうか。実際に私も図書館で勤務をしていて、少子化、高齢化、情報端末の発達などの様々な社会状況の変化の中で図書館の姿も変わっていくべきだと感じている。開館から10年を迎えた佐久穂町図書館が今後、どのような姿を目指していくべきかを考察していく。

1. 佐久穂町図書館の概要

佐久穂町は、2005年3月に佐久町と八千穂村が合併してできた人口約1万2千の町である。面積188.13平方キロメートル、長野県の東部に位置し、南北に千曲川が流れている。

佐久穂町図書館は佐久穂町のほぼ中心に位置する高台に2004年6月1日公民館も備えた生涯学習施設『花の郷・茂来館』の中に『さくまち図書館』として開館した。町の合併後に名称が『佐久穂町図書館』となった。今年

図1 佐久穂町の位置



出典：佐久穂町 Web ページ

で開館 10 周年目を迎える図書館である。公民館と同じ建物に入った複合館であり、公民館のエントランスとの間が自動ドアで仕切られている。図書館内は 800 平方メートルのワンフロアになっており、高い天井と大きなガラス張りの窓で明るい館内、書架の高さを低めに設定し、読み物以外は子どもと大人の本と一緒に並べる“混配方式”をとっていることなどが特徴である。蔵書冊数は 2014 年 11 月現在 9 万 6737 冊である。佐久穂町の同月現在の人口が 1 万 1965 人であることから、町民 1 人に対し約 8 冊分の資料が存在していると言える状態である。

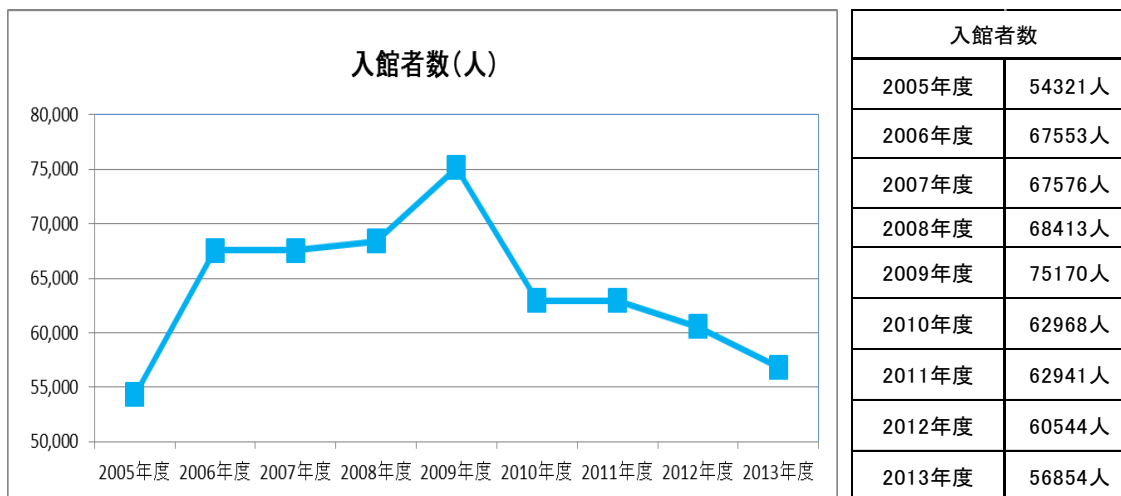
写真 1 佐久穂町図書館の内観



出典：筆者撮影

図書館を含めた総合文化施設の計画が立ち上がった時には、反対意見もあったとの話も聞いている。当時を知る司書に尋ねたところ、図書館という施設への馴染みがなく、どのような施設か知らない人が多かったことが、反対理由の多くを占めていたのではないかという話であった。他方で公民館報には町民から「図書館開館の要望の声」が寄稿されており、待望していた人もいたことが分かる。説明会を開き、「図書館は町民の誰にでも開かれている公共施設であり、大人から子どもまで読書、趣味、知的活動を行える」ということを丁寧に説明した上で理解を得て、町民にあった図書館になるように検討を重ね、準備を経て開館となった。開館日は子ども達を中心に図書館を待ち望んでいた利用者が大勢来館した。まだまだ資料が不十分な部分もあったが、利用者登録、貸出等も順調に伸びていった。しかし、2009 年をピークに来館者が減り続けている。背景に町の人口減少、少子化、高齢化、情報入手方法の変化などが考えられる中で図書館としても対策をしなければいけないと感じているところである。今までの評価されてきた部分は継続しながらも今、佐久穂町図書館はどこを変えられるのか、何ができるのか模索していく時がきているのだと感じている。

図 2 佐久穂町図書館の入館者の推移



出典：佐久穂町図書館入館者データを基に筆者作成

2. 注目・評価されている図書館

この章では今、注目・評価されている図書館とは何かということを考えていきたいと思う。図書館を評価する一つの指標として、NPO 法人「知的資源イニシアティブ」(以下 IRI) が主催する Library of the Year に選ばれた図書館とその選考基準について考えていきたい。指標として選んだ理由は選考基準が『これからの図書館のあり方を示唆するような先進的な活動を行っている機関』であり、今回のレポートのテーマにあっていると感じたからである。更に、長野県内の図書館でも 2011 年小布施町図書館「まちとしょテラソ」が、2013 年に伊那市立図書館が受賞しているのだが、その時の図書館関係者を超えて広がった話題性と影響力の強さも感じたからである。以下に 2006 年～2013 年までの対象及び優秀賞を受賞した図書館、評価内容を IRI の Web ページ (閲覧日: 2014. 12. 1) より抜粋した。2010 年、2012 年は図書館ではないため省略した。

表 1 Library of the Year に選ばれた施設・団体 評価内容

年	施設・団体名	評価内容
2006	鳥取県立図書館	ビジネス支援サービスをはじめとしためざましいサービス活動を展開するとともに、市町立図書館および学校図書館との連携により、県全体の図書館サービスのレベルアップに積極的に取り組んでいる。地域の中で、地域に関わって活動することにより、地域の役に立つ図書館をめざす、というこれからの図書館のあり方を示した点。
2007	愛荘町立愛知川図書館	図書館員がそれぞれの専門分野を持ち、町づくりに積極的に関わっている点。
2008	千代田区立千代田図書館	指定管理者制度を採用して、夜 10 時までの開館やコンシェルジュなど都心型公共図書館の新しい姿を提案している点、地元出版界・古書店・ミュージアム等とも連携した幅広い活動を展開している点。
2009	大阪市立中央図書館	HP が四ヶ国語で作られるなど「開かれた図書館」を実践している点、データベースの数が多く利用が簡単であるなど、図書館でのデータベース利用のモデルを示している点。
2011	小布施町立図書館	「交流と創造を楽しむ文化の拠点」として、各種イベントの実施や地元の方 100 人のインタビューの電子書籍化を行うなど、小布施文化や地域活性化の拠点としての活動を進めており、地域の公共図書館の在り方の参考となる点。
2013	伊那市立図書館	iPad/iPhone アプリケーション「高遠ぶらり」を活用した「街中探索ワークショップ」や、地域通貨「りぶら」の活用など、図書館というハコや仕組みの枠を超えた新鮮な提案とその推進により、新しい公共空間としての地域図書館の可能性を拓いている点。

出典：知的資源イニシアティブ Web ページを参考に筆者作成

ここに挙げられた図書館は、やはり従来の図書館から一歩抜け出した活動をしている。千代田区千代田図書館、大阪市立中央図書館は都市部の図書館の新しい活動に見える。どちらの図書館も区外、国外になど外に向けての発信に力を入れている印象を受ける。その他の鳥取県立図書館、愛荘町立愛知川図書館、小布施町図書館、伊那市立図書館はそれぞれの地域、地元で焦点を当てた上での新しい活動が評価されているように思う。都市部の図書館の目指すべき方向と、地域の図書館の目指すべき方向には違いがあることも理解した上で、それぞれの図書館のあるべき姿を新しい取り組みを入れながら行っていることが評価されたのだと感じる。

3. 先進的図書館視察

更に、今後の図書館の姿を考えるにあたり、注目・評価されている図書館とはどのような場所なのか、実際に見る必要性を感じた。この章では最近、私が足を運んだ先進的図書館で印象に残った点について述べる。

【東京都 『千代田図書館』】 2014年8月26日訪問（個人視察）

2008年にLibrary of the Yearに選ばれるなど評価をされている図書館である。午前11時ごろから1時間ほど訪問したのだが、近くの会社や官公庁の職員が昼休みに利用している姿が多くみられ、都会のビジネス街にある図書館の特徴が表れていると感じた。千代田図書館が注目・評価されている理由はたくさんがあるが、中でも大きな特徴はやはりコンシェルジュがいることである。司書が図書館の中の資料案内が中心であること

写真2 図書館コンシェルジュ



出典：千代田区図書館 Web ページ

ことに対し、コンシェルジュは館内案内のほか、区の情報や、区内の書店の在庫を調べてもらえるなど幅広い情報の提供主として扱われている。私が訪問した際にも、実際にコンシェルジュに声を掛けている方の姿が見られた。その方は、区で行われるイベントのチラシを求めて図書館に来館したとのことだった。「図書館に行ってコンシェルジュに聞けば何か情報があるかもしれない」という考えが実際に根付いていると思わせる場面であった。コンシェルジュがいない図書館では通常、司書がその役割を行っているが、利用者に余り知られていないことがある。コンシェルジュを置くことで、図書館で行われているサービスの広報を上手くしていると感じた。また、近くの神保町には古本屋が多く存在していることもあり店の商品の展示や購入案内もされていた。更に、神保町はカレー屋が多いこともありコンシェルジュ作成のお店案内があり、周辺地域と連携をうまく取ってサービスを行っていることが印象的であった。

【佐賀県武雄市 『武雄市図書館』】 2014年9月17日訪問（個人視察）

非常に賛否両論が分かれている図書館である。私も正直なところ従来の図書館の形を大きく変えた武雄市図書館に抵抗があったのが事実だ。しかし、ここまで図書館に注目を集めたという事は評価すべきだと思う。話題になることで市民からの注目や関心は高くなり、

職員も苦労と同時に、やる気も高まっていると考えられるからである。

武雄温泉駅から町の様子を見ながら歩いて向かったが武雄市図書館は、それまでの風景とは別世界であった。スターバックスコーヒーのマークがついている看板がまず目を引く。コーヒーの香りが漂い音楽が流れるおしゃれな空間は指定管理で入っている CCC（カルチャ・コンビニエンス・クラブ）が東京都渋谷区の「代官山蔦屋書店」のコンセプトを取り入れて作ったということだが、この地域では唯一無二の場所であるだろう。市民は地元はこの施設があれば嬉しいし、誇りにもなり得ると思った。

自分なりの使い方を見つけている常連利用者の様子も見られた。他方で観光客の姿も見られ、図書館の絵葉書や市長の著書、市の関連書籍などがお土産用として売られていた。佐賀県単独のガイドブックが余り無い中で、図書館を中心とした市単独のガイドブック『たけお散歩』が出版されたという事実は凄いことだと思う。『図書館が街を創る。』という書籍も出版されているが、まさにこの名の通りのことが実行されていると感じた。目新しさにばかり注目されがちだが、市長が図書館総合展で語った「図書館に縁遠い人にも優れた図書館サービスを届ける」「司書本来の機能を取り戻すべき」「本のコンシェルジュとして活躍してほしい」「Google の無味乾燥な検索結果よりもあの人に聞いてみようと思わせる方がいい」（樋渡啓祐、2014、137-138p）という言葉は、実は司書が心から望んでいる本来の図書館のあるべき姿の一つである。疑問点も正直あるが、一定の評価をされていることも理解し、良い所は取り入れる柔軟性が必要だと感じた。

【佐賀県伊万里市 『伊万里市民図書館』】2014年9月17日訪問（個人視察）

武雄市図書館と対として語られることが多い図書館である。伊万里“市民”図書館という名前を目指すべき方向性が現れていると感じた。目標には「伊万里をつくり 市民とともにそだつ 市民の図書館」と謳っており、まさに図書館の主役が市民であることを明確にしていることが分かる。

入口には「手をつなぐ育成会」の手で運営されている、福祉喫茶「あおぞら」がある。障害者の社会参加の場と共に、市民のくつろぎの場として利用されているとのことだった。さらに、隣接のソファ席には図書館としては珍しくテレビが設置され、利用している市民の姿が見られた。

カウンターでは利用者と職員が会話をしていた。必ずしも調べごとの案内だけではなく、利用者から振られた世間話に答えている姿も見られた。保育園児の訪問もあり、子ども達の声も聞こえた。正にお年寄りから子どもまで、市民が馴染んでいる図書館であると感じた。一般閲覧室、子ども開架室では緩やかに流れる音楽があるので声が気にならないよう

写真3 武雄市図書館看板



出典：筆者撮影

写真4 伊万里焼が展示される館内



出典：筆者撮影

に工夫されていた。

書架の案内に伊万里焼が使われていたことも特徴的だった。地元産業が活用されているところを見られるのは市民、特に子どもにとって教科書で習うよりも実感を持てると思う。また、私のように市外から訪れる観光客にも魅力であった。

北の庭には、開館時に協力してくれた人々の名前が定礎の代わりに設置され、開館の際の市民の意思を忘れずに引き継いでいくことを職員も常に意識しているとのことだった。グループ学習室は開館にあたりボランティアサークルが活動をするために必要な部屋・機材等を要望し、形にしたものであるとのこと、実際に当日も布絵本を作るサークルが使っていた。市民の意見が形になり職員と共に図書館を作り上げている、まさに“市民”の図書館であった。

【北海道恵庭市 『恵庭市立図書館』】2014年11月14日訪問（武藤ゼミ視察）

現在、乳幼児向けの図書館サービスとして全国に広がっている「ブックスタート事業」を日本で最初に行った図書館である。また、「恵庭市 人とまちを育む図書館条例」制定や「恵庭まちじゅう図書館」など先進的な取り組みをしているということでも有名である。しかし視察の際に対応していただいた菅原伸治館長以下の職員達は、「特に先進的な活動をしているという意識はない。必要だと思うことをその時に行ってきただけである」と話していたことが印象的だった。

ボランティアとの連携の強さも知ることができた。イベントやおはなし会の企画・運営もボランティアに任せているとのことだった。昨年、ボランティアの協力を得て図書館開館20周年記念企画として深夜24時まで開館を行ったそうだ。普段、図書館になかなか来られない層も来館ができ、非常に好評だったそうだ。ボランティア・職員には大きな負担になるので昨年1回限りの企画の予定だったが、有志が集まり今年も行うとのことだ。

恵庭市図書館で働く職員は、「本がいつでも市民の身近にあること」を目標にしているそうだ。ボランティアの話や、平日の午前中に玄関で開館を待つ利用者もいることから既に市民に図書館が身近な存在になっていることが感じられた。また、「将来子ども達が『図書館があったから自分は夢をかなえられた。』と言ってもらいたい」とも語っており、学校図書館との連携にも力を入れているとのことだった。今後も活動に注目していくべき図書館の一つだと感じた。

写真5 恵庭市図書館内観



出典：筆者撮影

4. 佐久穂町図書館が目指すべき姿

(1) 先進的図書館からの気づき

様々な図書館について調査を行い実際に訪問したことで、私の中で「これからの図書館に必要なこと」について2つの大きな気づきがあった。

1つ目は「役に立つ図書館」であるということだ。様々なサービスが図書館で行われているが、それが自分に役に立つことでなければ、利用者は中々足を運んでくれない。2014

年11月に神奈川県立図書館に訪問をし、谷一館長にお話を伺った際に「地域の課題を見つけ出し、それに合ったサービスをする必要がある」と教えていただいたが、まさにその通りで、前章で挙げた図書館はそれぞれの地域に合ったサービスを実行していることで評価を得ているのだと感じた。

2つ目は「交流がある図書館」ということだ。私が魅力を感じた図書館には職員・利用者・ボランティアなど、人と人との交流が必ず背景にあった。これだけ情報ツールが発達した世の中で、もはや情報を手に入れるだけの為に図書館を利用している人は少なくなっているだろう。これからの図書館を考えていくとなると、コンピュータだけでは補えない人との交流の部分が大きな意味を持つてくると思う。職員だけでなく利用者がボランティアも「みんなで図書館を作り上げていく」という姿勢が必要になってくると感じた。

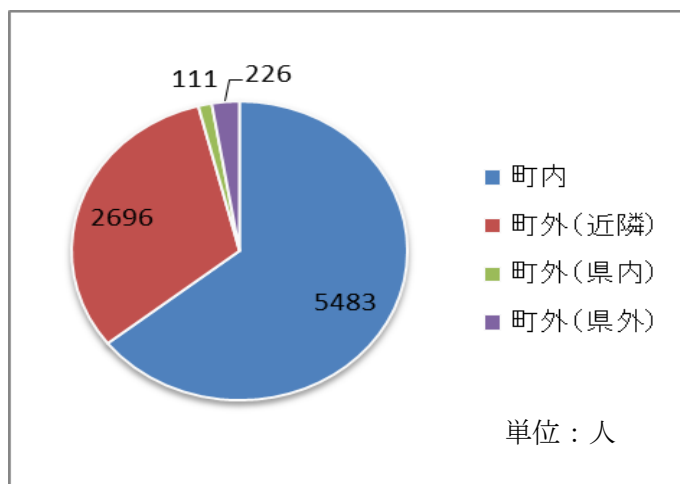
(2) 佐久穂町図書館での実践へむけて

前述した通り現在、佐久穂町図書館は、来館者や貸出冊数などから見て利用が減少傾向であることは間違いのない事実である。同時に危惧を抱いているのが、住民の図書館への関心が薄くなってきているのではないかということだ。通常利用を見てもそうであるし、ここ最近イベントの集客にも苦勞することがしばしばである。2014年11月に毎月1回行っている「とちの実おはなし会」も119回を数え、月1発行の広報誌「とちの実だより」も103号になる。続けてきたことにも勿論意味があるが、以前は図書館の存在自体や企画も常に新しく斬新に映っていたが、開館10年がたったことで利用者が慣れてきたこともあるかと思う。図書館で行うイベントにマンネリ化が進んでいることも否定できない事実である。これらのことを職員がきちんと受け止めた上で、変化することも必要だと感じている。

先進的図書館から気づいた「これからの図書館に必要なこと」2点について佐久穂町図書館ではどのように取り入れていけるかを考えていきたい。

1つ目の「役に立つ図書館」について考えてみる。佐久穂町図書館利用登録者を見ると2014年11月現在の全登録者数は8516人で、そのうち町内在住者は5483人、全体の64%を占めている。また、近隣市町村の利用者は2696人で町内在住者と合わせて8179人となり、これは全体の96%にあたる。このことから佐久穂町図書館を利用する人のほとんどが町民、近隣市町村在住者であることが分かる。佐久穂町の図書館を利用する人たちにとって確実に役に立つ情報の一つが「地域の情報」と考えられる。現在多くの人が個人端末で簡

図3 佐久穂町図書館登録者



出典：佐久穂町図書館登録者データをもとに筆者作成

単にインターネットを使える時代ではあるが、観光以外の住民の生活に密着した情報を拾い出すことは意外に難しいのではないだろうか。私も実際に大学時代を名古屋で過ごし、地元佐久穂町に帰ってきたのだが、地域の情報がインターネットでは網羅しきれておらず苦労した事実がある。

地域の情報は役場、商工会、病院、社会福祉協議会などへ行けば手に入れることもできるのだが、そこに情報があることを知る人は少ないし、知っていても出かけるにはハードルが高いと感じる人も多いだろう。そこで、図書館が地域の情報を一括で集めて提供する窓口になるべきであると考え。現在でも行っているところではあるが、まだまだ不十分である。理由の一つとして、情報を持っている施設側に図書館に情報を提供するという意識がまだ低いことが挙げられる。更に図書館が情報発信している施設を把握しきれていないという事実もある。そこで、まず第一歩として地域の情報の収集蓄積を図書館で行っていることを各施設に徹底的に知らせる必要がある。文書依頼と並行し職員も直接訪問して、実際に現場を見て情報の提供をお願いしていくことが必要だと考えている。担当者が変更になっても継続ができるようにするために、年度初めに確認することを決め事とする。更に情報の発行頻度のチェックをきちんとして、次の情報が出されているのに図書館に届いていない場合には、その都度確認をしていく必要もあるだろう。

それらを基にして充実した地元情報コーナーを作り、利用者に発信していく。最初は公開された行政などの情報を確実に集め広報し、次の段階としては個人の情報発信、例えば町内のお店の求人情報などにも広げていきたいと考えている。「図書館に行けば何か情報が手に入るかもしれない」と思われる場所になれば、情報提供も増え「役立つ図書館」としてより充実していけるのではないかと思う。

2つ目の「交流がある図書館」について考える。私は図書館に異動して5年が経過するところだが、これほど年齢層が広く、様々な方が自由に行き来できる施設は他にはなかなか探すことができないと考えている。知識や技術を持っている「町の宝」というべき人も訪れている。その人たちは図書館の職員に自分の行っていること、できることを嬉しそうに話していつてくれる。そういった「町の宝」を活かす方法を考えることも、今後図書館で行っていききたいと思っていることである。人と資料をつなぐことはもちろん、人と人とを繋ぐきっかけ作りをする場所になりたいと考えている。本人たちに了承を得た上で、まずは現在図書館で把握している「町の宝一覧」を作りたいと考えている。Facebook上では既に輪が広がっていることもあるが、中高年者以上の方や機械が得意でない人の為に、図書館を基地の一つとして現実にもこの輪をつなげていきたいと思っている。輪が広がるごとに一覧の更新もしていきたいと考えている。

また、図書館を普段利用しない人もこの交流の輪に取り入れたいと考えている。恵庭市図書館の24時間開館にヒントを得て夜の時間、図書館の閉館後の時間を上手く使うことができなにか考えている。延長開館を毎日することは現在の職員体制では難しいので、利用者の反応と職員体制を整えることを考えながらも、まずは今できることとして閉館後の図書館でイベントを行いたい。

更にボランティアと一緒に活動していくことは「交流がある図書館」から外せない要素

である。現在、佐久穂町図書館には、ほとんどボランティアがいない状況である。図書館に興味がある人にボランティアとして活動してもらうために、まずは図書館として、どんなボランティアが必要かを整理し、募集したい。既に能力や技術を持っている人は上手く仲間づくりの手伝いをして継続してもらえるように働き掛けていく必要があると思う。また気持ちはあるが、能力や技能が無い人には講習を開き育てていくことも考えていきたい。その中でも、また仲間づくりの手伝いをして、修了後は継続的活動をしてもらうという目標を定めた講習を開く必要があるだろう。図書館側からの仕掛けも勿論だが、こういった動きが徐々に利用者同士への交流へ繋がり、ボランティアとして図書館の枠を超えて、町のことに関わってくれることも期待するところである。

(3) サービスを提供する側の体制

従来の図書館の良さを理解し利用している人のことも考える必要がある。資料の案内を確実にするためには、それに応えられるための司書は必ず必要なので、職員一人一人が意識を高く持つ為に定期的に研修も行っていかなければならない。図書館職員の一人一人が“自分が自信を持ってできることを作る”という目標を持つようにしたい。

更に、臨時職員が多い職場で職員が固定でない現在の状況は変えていく必要があるだろう。知識を積み重ねていくという特殊な職場であることをまずは理解してもらい、人員配置や異動の際の考慮を人事にも掛け合っていくことが必要だろう。

また、図書館を交流の場としたいと私は考えているが、静かな図書館を望む利用者もいることも理解する必要がある。佐久穂町図書館はワンフロアの図書館であることを考慮すると、小布施町図書館で取り入れられているような“時間帯によって使いわけをするタイムシェアリング制度”などが活用ができると思う。その上で、現在図書館条例に謳われている「静粛に」の言葉についても再考慮していく必要があるだろう。

他にも年に1回は新しい取り組みに挑戦していくなど、図書館も時代と共に常に動いていく必要があると思う。イベントなど図書館側からの仕掛けを行ったところで“利用してくれる人”は勿論のこと“利用をしない人たち”にも「なぜ利用しないのか」ということを問いかけて、その理由を探り改善することで、より良い図書館になるために行動すべき方向が見えてくるだろう。

おわりに

私は自分の働いている佐久穂町図書館を「もっと知ってほしい」「もっと使ってほしい」「もっと良さを知ってもらいたい」と思いながらこの5年間を過ごしてきた。様々な企画を行ったり、自分たちなりに工夫をしてきたつもりだが中々上手くいかずに、反省することも多かった。

今回、全国地域リーダー養成塾に参加したことで、地域活性化の為に図書館で何かできることがあるのではないかと、じっくりと考える機会を頂いた。全国から集まった仲間や講師の方から様々な情報を得て、実際に全国の図書館にも足を運ぶことができた。そして、今回「佐久穂町図書館が目指すべき姿」を一つの形として見つけることができた。今後も職場の仲間や地域の方の力を借りながら、佐久穂町図書館をより良い図書館にできるよ

に活動をしていきたいと思う。

<引用文献>

- ・柳与志夫 (2012) 『千代田図書館とは何か 新しい公共空間の形成』、ポット出版、p. 13
- ・樋渡啓祐 (2014) 『沸騰！図書館 100万人が訪れた驚きのハコモノ』、角川書店、pp. 7-138

<参考文献>

- ・猪谷千香 (2014) 『つながる図書館—コミュニティの核をめざす試み』、筑摩書房
- ・中西一雄 (2013) 『たけお散歩』、株式会社ネコパブリッシング
- ・中西一雄 (2013) 『図書館が街を創る。「武雄図書館」という挑戦』、株式会社ネコパブリッシング
- ・花井裕一郎 (2013) 『はなぼん わくわく演出マネジメント』、文屋

<WEBページ>

- ・伊万里市立民図書館 <https://www.library.city.imari.saga.jp/>
閲覧日：2014. 12. 1
- ・恵庭市立図書館ホームページ <http://opac.city.eniwa.hokkaido.jp/>
閲覧日：2014. 12. 1
- ・知的資源イニシアティブ <http://www.iri-net.org/loy/loy2014.html>
閲覧日：2014. 12. 1
- ・千代田区立図書館 <http://www.library.chiyoda.tokyo.jp/>
閲覧日：2014. 12. 12